1993年度特別展

和 紙

10月1日（金）～27日（水）

學習院大学史料館

1993年10月

學習院大学史料館
この十数年の間に、経済や文化などあらゆる方面で、新しい記録の媒体と流通方式が実用化し、情報化が進みました。その中で私たちは、様々な記録を蓄積し、あるいは掘り起こし、自らの歴史と経験を活かす行動様式を身に付けつつあります。日本社会の基底は、この意味で大きく変化したと言えましょう。

＜和紙に墨書する＞という行為は、このような変化が起こる以前の記録方式の基礎型であり、政治や経済を含めた文化的意義を支えてきました。本展では、この和紙を直接に取り上げ、保存の心得とともに、歴史的な様式・生産・流通のひとこまを提示しました。

これによって、和紙の文化遺産を正しく継承し、現代に生かしていくことを願ってやみません。一覧の後にご意見やご質問をお寄せいただきますことを、一同の喜びにしたいと思います。

なお本展は、奈良県の内田優吉哉より古文書を借用し、また福井県和紙工業協同組合・（財）紙の博物館・（財）文化財文書研究所・森八郎研究室・T R C 東京修復保存センターより資料提供とご指導を頂いて、開催することができました。ここに、厚く御礼を申し上げる次第であります。

学習院大学史料館
館長 高埜利彦
和紙の里
---越前五箇村---

<映像資料>

奉書生産で名高い越前国今立郡五箇村（現福井県今立町）は、現在の福井市の南部に位置する。江戸時代は、岩本・大槻・不老・新在家の五箇村がまた、福井藩の領地であった。

五箇村の和紙生産はすでに15世紀には知られ、16世紀には、紙屋たちが大槻神社に紙を供え、紙神の保護を祈念する風習が広がった。紙産業の発展は、江戸時代に顕著である。その発展の歴史をゆっくりとご覧ください。

1 今立町の和紙生産と歴史的景観

学习院大学史料館制作

2 越前和紙

福井県和紙工業協同組合企画・民族文化映像研究所制作

3 越前の和紙づくり

福井県和紙工業協同組合企画・北陸テレビ制作

原料と製品

現在も使われる代表的な和紙の原料には、楮・三徳・雁皮の三つが使われます。原料と製品を手に取ってご覧ください。

1 楮の皮と楮紙（越前奉書）

福井県和紙工業協同組合製作

楮の皮と楮紙は、1cm程度の繊維を、よく絡み合って、豆を合わさして作られる。この特徴から古代より最も広く用いられ、書用だけでなく、紙衣のように生活の多方面にも活用された。

2 三徳の皮と三徳紙

福井県和紙工業協同組合製作

三徳の皮と三徳紙は、1cm程度の繊維を、よく絡み合って、豆を合わさして作られる。この特徴から古代より最も広く用いられ、書用だけでなく、紙衣のように生活の多方面にも活用された。

3 雁皮の皮と雁皮紙

福井県和紙工業協同組合製作

雁皮の皮と雁皮紙は、1cm程度の繊維を、よく絡み合って、豆を合わさして作られる。この特徴から古代より最も広く用いられ、書用だけでなく、紙衣のように生活の多方面にも活用された。

保存の心得

和紙を素材とする史料を原形・原色のままに保存するためには、次の利用を注意を払って、全体的に掲示を講ずる必要がある。

私たちが忘れがちであるのは、人為的要因である。つまり折れ・擦れ・圧縮・付着物使用、垢や油分の付着などである。

物理・化学的要因には、光、酸、アルカリ、塩化物、湿度変化があげられる。急速に湿度が低下すると温度が上昇し、史料が変化し、または結露してさらに他の要因に結びつきやすくなる。湿度20±2度、湿度60±5%をともに維持することが望ましい。

直接に大きな被害を与えるのは、生物的要因（虫・かび・害）であ
4 湿気・埃などによる劣化の進んだ例

学習院大学史料館所蔵文書

5 シバンムシによる虫喰いの進んだ例

学習院大学史料館所蔵文書

6 装備具の例1 中性紙ボードによる巻子用箱

学習院大学史料館製作

給巻物をはじめ、巻子型の史料を収める容器である。これを用いて防塵ももちろん、出納時・保管時の形崩れを防ぐことができる。中性紙を用いて自作すれば、比較的少ない経費で済ませることができる。設計図は、相沢元子ほか『『容器に入れる——紙資料のための保存技術——』』（日本図書館協会、1991年）を参照されたい。

7 装備具の例2 中性紙ボードによる保護ホルダー

TRCC 東京修復保存センター製作

巻子体の史料を収める保護ホルダーである。<「狭（ちつ）」は、史料一点一点の厚さ（高さ）に合わせて作るが、このホルダーは、厚さに差が大き、また物が側面を中性紙が覆うようになっている。狭くくらべて容易に作ることができ、しかも保護と利用の便が向上した装備具であるといえる。

種類と形態

七世紀に和紙の国内抄造が始まって以来、さまざまな和紙が各地で生み出された。栄格では、厚手で薄のような光沢をもつ複紙、白土などを混ぜてきめ細かくしなやかな風合いをだした素紙など、雁皮（婆紙）系では、鶴卵殻の淡黄色ときめ細かい光沢をもつ種の子紙、漢の半間に張る幅をもつ間に合紙などがあり、また紙を漉き返してリサイクルした宿紙もある。

これらの紙は、用途に応じて左図のように加工して、用いられた。これらの特定の種類と形態は、書体や封式などとともに、意味を外形に表現したのである。

8 <大高欄紙> 領地完行状

1699（元禄12）年2月25日

史料館所蔵 奥州偏倉藩主阿部家文書5

9 <間に合紙> 領地目録

1699（元禄12）年2月25日

史料館所蔵 奥州偏倉藩主阿部家文書5

徳川将軍が大名に領地を宛て行う、「領地完行状」の料紙には、最も大型で風格のある「大高欄紙」が用いられた。展示例のように、近世以降の撰紙には紙が作られることが多かった。また、領地の国馬の名を書き上げた「領地目録」の料紙には、一紙が約3尺の幅を持ち、文脈の意味を書き込むことができる「間に合紙」（被の横幅に合う、の意味）が用いられることが多かった。

列品8は、徳川儒者が出席した朱印状、列品9は、列品8中で「目録在別紙」とししている領地目録である。阿部忠秋を藩主とする諸代大名阿部家は、寛永12（1625）年下野国壬生藩主となり、以後、武蔵国忍藩、陸奥国白河藩を経て今国偏倉藩主として幕府を守り、この間には6人におよぶ老中就任者を出し、代々幕閣に重きをなした代表的な諸代大名であると言える。
10 《島の子紙》（島の子役を申し付け、夫役免除とする結城秀康黒印状）
1602（慶長7）年9月10日
越前国立郡岩本村内田吉左衛門家文書
福井藩主結城秀康が、島子屋右衛門に島の子役を申し付けにあった。夫役を免除することを証明した黒印状である。横折紙で使われたこの文書の料紙は、高価な雁皮をぜいたくに使い、箋
卵色がよく出ている典型的な《島の子紙》である。

11 《奉書 横折紙》（高志摩同前に諸事申し付ける旨書状）
（寛文元年以前）3月2日
史料館所蔵 常陸国下館藩家老牧家文書59
下館藩藩主石川源平守総長が牧甚五兵衛にたいして、父の志摩守正虎様に家老職を申し付けた書状である。この列品のように、奉書は武家のもっと正式な文書の料紙として重用され、書状の場合には横折紙として使われることが多かった。
なお牧家は、第四代正政の代に下館藩藩主石川家（2万石）に召し使われることとなり、第五代正虎の1660（万治3）年に家老（持高1000石）を申し付けられて以後、代々家老を勤めた。

12 《宿紙》口宜案（阿部正義家書侍従任官）
1711（正徳元）年6月1日
史料館所蔵 奥州錦倉藩主阿部家文書130
阿部家当主正義が侍従職に任じられた際の伝達文書である。形式的には、天皇の命令を載せる原稿が上野小川坊城大納言に伝達した文書であるが、実際には阿部正義に下され、任官文書として機能したのである。
《宿紙》は、薄墨色の渡し返し和紙、いわゆるリサイクル和紙である。平安時代末期から紙屋屋などを中心に抄造され、特に大量の写経紙が使用された奈良・京都では、盛んに抄造された。紙質は不
安定であり、漉きムラもめんだつ。
口宣案は、本来的に内部伝達文書であったため、料紙に＜畳紙＞
が用いられたとされている。しかし実際に、新紙の抄造過程で墨
を加え着色したものを用いられた。

13＜半紙 横半帳＞御用向手控（上名栗村古組役用に使うべき
紙などについて）

近世後期
史料館所蔵 武蔵国秩父郡上名栗村町田家文書389
上名栗村（現埼玉県名栗村）古組名主町田栄二郎が、村運営のた
めの重要事項を書き加えていった手控えである。古組百姓の入会権
所持の有無や五人組に関する記録、そして、年間に使用する村方文
書（御用留・宗帳帳など）の料紙の種類と量などについて記載があ
る。村運営のための先例集・マニュアルとして使われたのであろう。
このように携帯性を求める記録には、横半帳が用いられた。

生産と集荷

江戸時代における和紙生産は、1798（寛政10）年の『紙漉重実記』
によってよく伝えられている。金工房は、刈り取った藁を蒸して皮
を剥ぎ、黒皮を削り取る作業から、漉き上げた漉紙を絞り、一枚つ
つ張りに乾燥させるまで、多くの手がかけられた。

越前五箇村の生産者は、一八世紀に間屋前貸制度に組み込まれた。
金融業・商業を手広く経営した間屋商人の内田吉左衛門家は、毎年
11・12月になると漉屋に原料仕入金を貸し付け、3～5月に製
品を集荷したのである。

前貸制度下にいた漉屋の一年の半を経てあり、借金を返済し
されずに、無資百姓に没落する者も少なくなかった。

14 紙漉重実記（後刻版）
1798（寛政10）年4月

学習院大学図書館所蔵 旧660-2
石見国（現島根県）の国東治兵衛が、石州半紙の紙漉きの概要を
まとめてパンフレットとし、紙商人たちに紙漉きの苦労を知らしめ
るために著した書である。工程は図解をとじて丁寧に説明され、
また漉屋や紙商人たちの会話、仕事場なども記載されており、江戸
時代の紙漉をめぐる事情を最もよく伝えている。

15 借用申仕入銀之事
1754（宝暦4）年11月

越前国今立郡岩本村内田吉左衛門家文書
漉屋の庄兵衛は、年貢上納を除き、紙漉を後年に売上げる
上り次第、製品で返済することとした。しかし、内田家らの間屋商
人は元銀に対して月1～1.5％の利子を、さらに紙の専売制
をした福井藩は、紙会所を通じて6％の運銀銀と2％の判料を収
奪するために、漉屋たちは借銀を返済し切れず、毎年、仕入銀を借用
し続けなければならなかった。庄兵衛もこのような漉屋の一人で
あり、奥書で「毎歳借用仕候儀二御座候間、幾年も此証文用之借
可被下候」とし、この証文を毎年使い続けることになかったのである。

16 覚（内田家の経営内訳）
子（宝暦5）年正月

越前国今立郡岩本村内田吉左衛門家文書
本文書は、内田家の資金を書き上げた（勘定目録）であり、経営
の全容を知ることができる。この年度の総額は、金5231両余で
あり、半期に約めたのであろうか、全体が二つに分けられている。
前半では、各地商人への出資金や貸金、福井藩紙会所への判元出資
金など、後半では組・字・宗・様・計・備などのほか、質権・
問屋前貸制度下の漉屋の1年

内田家の経営からみる

五箇村和紙の流通

五箇村紙業の盛況をうけて、1699（元禄12）年、福井藩は紙会所を設置し、運上金を課した。全ての紙は、一旦、判元に買い取られても、市場に送られたのである。

仲買をしていた内田吉左衛門家は、1703（元禄16）年からこの判元を勤めるが、全国的な市場構造の変質のままに、その商業経営もまた変化を遂げられた。

すなわち、七世紀初頭までは、福井・三河・江戸・京都などに目を配り、地域間・季節間の相互の利益を生かし、以後には、経営全体に占める紙業の比率を高め、江戸・京都の紙漉屋の販売・売上数が増数に応じて送荷し、送荷量に応じて集荷する恒常的な方式に変化したのである。

17覚（勘定目録）
1783（天明3）年2月

越前国今立郡岩本村内田吉左衛門家文書

問屋商人内田家は、毎年常に勘定目録を作成した。この年度の商い総額は、金3791両余りであり、1708（宝永5）年の列品16の段階に比べ、経営状況が低下していることが知られる。

また本文書では、内田家から江戸間屋への贈送にあった自子船頭大黒屋光太夫の船が行方不明となり（ロシアに漂着）、12荷の紙（代働2貫50文3分）などが失われ、この勘定から除外したことなどがわかる。このような損失は他にもあり、和紙が江戸にたどりつく途上にはこのようなリスクも伴っていたことが知られる。

18覚（副本購入の領収書）
3月22日
越前国今立郡岩本村内田吉左衛門家文書
岩本村の野辺小左衛門家は、内田吉左衛門家と同様に間屋商人を勤めていた。本文書は、野辺家が越後屋の江戸駿河町南側出店から反物を購入した領収書である。この両家は同族関係にあり、内田家が野辺家の支払を屋代わりしていたであろうことが推測される。

19 鎌倉道中駄賃銀記録
1800（寛政12）年5月
東途道中駄賃
1803（享和3）年11月
五ヵ村より京都迄駄賃積り
1806（文化9）年12月4日

越前国今立郡岩本村内田吉左衛門家文書
内田家が集荷した紙は、西辺り・東辺りで京都や江戸に送られた。
五箇村で染められたいわゆる越前奉書は、京都に送られるまでの間に、
上包代や緑・紫代などが1枚につき銀2文余（約金1両）ほど、
駄賃（運送料）が銀3文余の経費を要した。展示部分では、
五ヵ村より府中・今宿・鶴本・緑川・湯尾・今庄を経いで、京都や名古屋に送られたことが知られる。

20 対談申・一札之事（紙代金返済について）
1837（天保8）年3月

越前国今立郡岩本村内田吉左衛門家文書
江戸の紙間屋小津次郎左衛門は、内田家に支払うべき紙代金250両を抱えたまま、休業に追い込まれた。本文書では、盆前までに金100両を支払い、残り150両を再び開店した後に支払うこと
を対談約定している。近世後期には、越前和紙の売れ行きが不振に
なった上、本文書や列品18などの損失によって、内田家の経済が
悪化していったのである。
本展を制作するにあたり、次の方々にご協力をいただきました。ことに記し、厚く御礼を申し上げます。

福井県和紙工業協同組合
和紙の里会館（福井県今立町）
（財）紙の博物館
（財）文化財虫害研究所
森八郎研究室
TRCC東京修復保存センター

また本展では、以下の文献を使用しました。詳しくお調べになりたい方は、ぜひもとご参照ください。
1. 『書籍・古文書等のむし・かび害保存の知識』
   （（財）文化財虫害研究所、1983年）
2. 『文化財の虫害と保存対策』
   （（財）文化財虫害研究所、1987年）
3. 相沢元子ほか『容器に入れる——紙資料のための保存技術——』
   （日本図書館学会、1991年）
4. 朝日新聞社編『和紙事典——神の創りたうたもの——』
   （朝日新聞社、1986年）
5. 『和紙の手帖』（全国手すき和紙連合会、1990年）
6. 大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986年）
7. 『日本古文書学講座』（雄山閣、1979年）
8. 日本歴史学会編『概観古文書学』近世編（吉川弘文館、1989年）
9. 高埜利彦『幕藩制中期における生産者支配の一考察』
   （『日本歴史』第354号、吉川弘文館、1977年）
10. 同『和紙』（『講座歴史和社会史1』、日本評論社、1983年）
11. 同『近世中期における商業経営の変質』（『学習院大学
    文学部研究年報』第29冊、1983年）
12. 海野福寿『蔵紙と駿紙』（『地方史研究』第39号、1959年）
13. 小糸田淳編著『岡本村史』（岡本村史刊行会、1956年）

※特別展期間中に限らず、史料保存についての相談を承ります。ご遠慮なく、お申し出ください。
第12回 特別展

近世百姓の共同世界
—信濃国五郎兵衛新田村—

1992年10月1日〜24日

学習院大学史料館

1992年10月

学習院大学史料館
あいさつ

１９７５年に開館し、少しずつ教育・研究体制を整備してきた本史料館も、今年で第１２回目の特別展を迎えることになりました。今回は、長野県松本市と信州農村開発史研究所のご協力により、江戸時代の代表的な新田村である信濃国五郎兵衛新田村の古文書をお借りして、開催することができました。

さて本展では、江戸時代の五郎兵衛新田村において、百姓たちの共同世界がどのように構成されていたのかを、史科学的な検討をまじえながら多角的に提示するよう試みました。

なお、本展の展示史料およびパンフレットでは、身分制の編成のもとに様々な人びとが構成していた農村社会を正確に理解しうるために、当時の差別的呼称をそのまま使用しました。もとより、当時の社会に対する枠組みの理解の前進が、不適切な歴史解釈を排し、人間や組織の歴史を正しく見つめ直すことにつながると考えてのことであり、本展がその一助になることを願っているだけです。

ご高栄の後にたくさんのご意見・ご質問をお寄せいただければ、館員一同、至難であります。

学習院大学史料館
館長 久野 秀男

＜映像展示＞ 用水と新田の歴史的景観

長野県松本市にある五郎兵衛新田は、中山道の塩名宿と八幡の間、街道南側に開かれた。近世初頭に草原であったこの地に、市川五郎兵衛は用水路を引き、１７世紀のうちにみごとな新地に変貌させたのである。

この用水路は、奥秩父山系から流れる川から取水し、およそ１８kmで新田に達する。その途中には山や断崖を堀切した用水のトンネルや高木を架けた橋が点在し、また用水工事で始動された人々を映す裏部屋の跡が点在し、また用水工事で始動した人々を映す水神殿がひっそりとたたずむ。

新田は南北に流れる用水から東面に広がり、用水に沿って上原・中原・下原の三つの集落がある。このうち上原には、村社であり雨乞い祭礼を行なった国分社、そして「柳沢クルク」と呼ばれる名主柳沢一の居宅がある。

ここでは、次の映像展示をご覧いただきます。

１ 五郎兵衛用水と新田の歴史的景観

２ 名主柳沢家をたずねる
協力：長野県松本市教育委員会教務長 柳沢哲郎 氏

３ ＜学習院大学史料館講座８＞ 1992年7月2日録画
講師：信州農村開発史研究所主任研究員 斎藤洋一 氏

新田にかけた生涯——市川五郎兵衛と五郎兵衛新田——

- 1 -
新田開発と関村

父四郎兵衛が徳川家康から策内部で開発を許可されたことを記録に、市川五郎兵衛は1626（寛永3）年12月、小諸藩から認可を経て新田開発に乗り出したとされている。

数年を経て用水関係工事を経て、1631年には村人たちの要望で、高27石9斗余が年貢免除とされ、1633年の検地では村高439石余が打ち出された。はじめ原新田村・穂島新田村などと呼ばれたこの村では、開発者は市川氏が用水管理や村内制限に関する権限をもっていた。

1669（寛文9）年には村高が688石余となり耕地拡大の大半を終えた。このころ市川氏が上野国楽沢村に切り、五郎兵衛新田村の名のもとに名主湯沢氏と年寄者による運営が始まった。

＜列品＞
1 矢崎原寺開発許可状

五郎兵衛記念館収蔵

市川五郎兵衛は、徳川家康の許可を受けて、小諸藩領内浜下村の芝生の開発を許可されたことがあったとされ、これに続いて本書では、奉行村から水を引いて矢崎原の芝生（荒れ地、ないしは草原）の開発を願ったところ、かねて平尾右近を通じて申し入れたこともあり、願いの通りに聞き届けると小諸藩の高木三左衛門らが五郎兵衛に追及している。本文書がいわゆる五郎兵衛新田村の開発許可状であるとされている。しかしこ文書・様式の異なる許可状（湯沢信佐家文書二、B-1）も伝来しており、史料学的には未詳の部分が残されている。これについては表湯沢一氏の検討がある（末尾参考文献5）。

2 八幡原新新田水帳

1633（寛文10）年8月28日
矢崎新田御続帳
1640（寛文17）年8月14日
小諸藩開政
1648（寛永16）年8月7日

柳沢信佐家文書（一）181・183・184

用水関係をもって耕地開発が進み、1633年頃にはすでに耕地が造成され、綿打ちは（土地の測量）を担当したのは小諸藩の大名七右衛門・三神六左衛門の両人であり、田地333町余・畑地約8町、石高にして439石余が打ち出されている。この後たび重なる耕地造成と、五郎兵衛新田村の年貢地は次第に増加した。年次が下るにつれて、等級の低い田地が開かれていったことが知られる。

<table>
<thead>
<tr>
<th>種目</th>
<th>上</th>
<th>内</th>
<th>下</th>
<th>中</th>
<th>六</th>
<th>下人</th>
<th>下下人</th>
<th>養</th>
<th>人</th>
<th>付</th>
<th>見付</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A</td>
<td>宽永30年</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
</tr>
<tr>
<td>B</td>
<td>宽永4年</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
</tr>
<tr>
<td>C</td>
<td>宽永9年</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
</tr>
<tr>
<td>D</td>
<td>宽永9年</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
</tr>
<tr>
<td>E</td>
<td>宽永9年</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
</tr>
<tr>
<td>F</td>
<td>宽永9年</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
<td>00000</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（備考）A-1は寛永11年、B-1は寛永7年、C-1は寛永11年の付属資料より作成。ただし寛永11年の付属資料では明細を上書きしている。

3 原新田村田yard之定文

1661（寛文11）年12月
柳沢信佐家文書（二）C-10

はじめ小諸藩領であった五郎兵衛新田村は、1648年に江戸幕府領（ただし小諸藩領地）とし、1661年には甲斐国府甲府領、1701（元禄14）年に甲府領へと変更された。本書文は、小諸藩領が佐佐左衛門が当時原新田村と呼ばれていた五郎兵衛新田村の住民が田地の等級を定めた資料である。高辻・出高・興安をあわせた58石余のうち181石3斗1合（定額）が当該年の年貢高とされ、村では新田が急激に増加し、内部に競争するように定められた。
五郎兵衛用水の共同管理

五郎兵衛用水はいくつかの灌漑を増強し、土井を除く、里に水を灌漑する。灌漑の方法は、各地で実施されており、破壊しやすく、経えず修復をしなければならないとある（図参照）。

灌漑役人は、このための人足動員から田舎住民までを兼ね容け、大畑の場合は目標見解を作成、提出し、見解を受け、「御飭書」によって御飭をおくことになった。しかし、日常的な小畑の灌漑や灌漑、百姓役で賜われ、年間延べ3千人以上を要したのである。

また1707年（宝永4年）には、用水の番をしきれないとして、灌漑を禁止する高札の下冊を願い出ている。これらの共同管理によって用水は維持され、番水制にもとづいて規則正しく田に水がめぐったのである。

五郎兵衛新田と用水の概要図

4 佐川佐久郡五郎兵衛新田村用水堰目論見帳
1705年（宝永2年）2月
柳沢信佐家文書（一）3412

本帳簿は、用水を修復するのに、役に立つ同市議会により修復の仮証をなされた、役に立つ仮証の大きさ、所要、必要な人足数などが下見者半分で見た書写に対してにより上げられている。修復許可、あるいは役に立つ仕事の着事が書証によって作成されたと考えられる。

5 五郎兵衛新田堰掛入用目録
1682年（天保2年）9月
柳沢信佐家文書（二）H-23

1680年の矢島村山鎌岳の崩壊にともない、82年9月、新たな堰掛をつくるためにこの目録の本帳を甲府藩代官所に提出した。この工事は、木材750両のほか、金物、大工、職人627人、人足710人、金銭にして金76両ほどを要する大がかりなものであった。この費用をまかなうため、村では同月に年貢のうち初80俵の供物を願い出ている（柳沢信佐家文書二H-22）。

6 豊場鎌番水改帳
1771年（明和8年）5月
五郎兵衛記念館古文書G-4-23

五郎兵衛用水は上原の分水盤から上原、中原、下原、相藤村の3方面に分けられた。

本帳簿は、上原、中原、下原に流れた用水が、田場の番水ごとに頻繁に流れていく様況を記録したものである。5月13日に上原方藤田からはじまり、16日早過ぎ日に中原の番水に示され、18日早過ぎてから19日には再び上原の番が番水をうけており、7日間で全ての田場に番水がいきわたっていた。

7 急件願書以御新築仮上検御事（灌漑を禁止する高札の下冊願書の控）
1707年（宝永4年）5月
柳沢信佐家文書（二）H-67

列品4でみたように用水工事の際には目論見帳を作成して作業を進めているが、実際にはそのほかに用水の番をする人手が必要だった。本文書は、用水の途中に他鎮の村々があるため、自力だけで番をしてしも水が切りとられる、つまり溢れるとするとして、幕府代理方に高札5枚の下冊を求めた願書であり、下冊が控として保管されている。
共同世界の組織と運営

18世紀に入ると、図のように独自な村運営の秩序が形成された。その特徴の一つは、職業からの約40名を長百姓・五郎組成員（＝本百姓）とし、それ以外の高幹百姓・無高百姓を長百姓の「組頭」・「組子」とする長百姓制である。長百姓は、8人の五郎組頭を村の組頭として村政を主導し、農林・無益金などの管理権を保持した。

しかし一方、村では用水管理や課役除免の訴願の際、無百姓数十名の進書を作成し、または「無百姓代」を立て、領主に働きかけた。1723年（享保8年）にこの延長上に直された「百姓代」を通して、高幹百姓たちの意向が村政に反映されていた。

また村では、寺社制度を担う寺院僧侶、祭礼を司る神職、警察活動のために招いた「積多」など他の分身の者と協同関係を、さらに3ヶ村雨乞組合や千曲川橋梁維持組合などの組合と包括関係を持って、共同世界を成り立たせていたのである。

－7－
ついて第3条では、女・童児の立ち入りを禁止すること、草を刈りあるいは木枝を取った場合に送金（罰金）を徴収すること、さらに「被者」の場合は「捕殺」よりも送金をすることが定められている。第2条末尾の「捕」の扱いも同様であるので、「捕」は、少なくとも経済面において被者（即長百姓）に保護され、かつこの村内法にたいして直接に責任を負わない立場にあったことが知られる。

10 定着助業を兼ね備え（村役人給などについて）控

1725（享保10）年2月

松尾出雲家文書（一）1280

本文書は、祖頼・百姓代・用水堰指人に成る構成と役務、そして役務（役割）で必要とされる給料（必要）について百姓が取り決めた村法である。五郎兵衛新田村では、運とくとも1723（享保8）年には「百姓代」が定められ、これにともなって五人組頼8人が4人つづき交互で村の祖頼をつとめることとし、その代わりに「祖頼差し」の役務をつとめる百姓代を毎年交互で置くとしている。本文書ではこれらの変更を祖頼8人では費用がかかるためとしているが、この背景には1723年から、多大な村入用を削減するために多くの百姓が争った村方騒動があったのである（松尾出雲家文書二C－65、D－25）。

11 口上巡ね上げ時御事（検見入の上申願書）

1732（享保17）年8月

松尾出雲家文書（二）C－78

査の長表のために不作であると見込んで133名の百姓たちは、同年の百姓代（村役人）である査左衛門を「氷百姓代」に立て、本文書によって幕府代官所に検見入を願うよう名主・祖頼に願い忘げた。五郎兵衛新田村は1725（享保10）年から「定発額」の適用を受けていたが、これによって「増免」をしてもらい、査を減額してもらう必要があったのである。これを受けて村役人たちは、同月のうちに検見入願書を平泉役所に提出している（C－79）。ここでは、百姓たちは査の生産状況を敏感に察知し、百姓代（「懲百姓代」）を通して、彼らの意向を村政に反映させていったことに注目しておきたい。

12 進上仕候殿之文之事（「懲多」移住に際しての懲罰文）

1707（宝永4）年2月

長野県民科村五郎兵衛記念館所蔵
当初「古高439石」にこの役がかけられたが、長用水を村の水道で維持している
として幕府に訴え、「古高半役」つまり約220石の役として費用・人足を負担す
ることとなった（玉造兵衛記念館古文書D－1－5）。領主に配当されなかったた
において、横植えの村々が組合をつくって生活に欠かせない橋を維持管理した本
事例は、地域社会の共同性の一端を覆せる。

共同世界の文書管理

玉造兵衛新田村に留集した人々の、様々な営みの記である文書記録。その管理の
あり方は各時代の共同性のあり様をよく物語る。

柳沢一族は次の系図のように名主を世襲したが、三宅衛門から彌五郎衛門に交替
した1732（享保17）年には、はじめて村方三役が選任し村方文書の引継目
録が取りかわり、「叡」と名付けられた懸案（文書案内）とともに引き継がれた。
村政の秩序化が進んだこの時期に、文書記録は村役人が共同で管理すべきものに変
化したと言えよう。

さらに1791（寛政3）年には村方文書の出納用の目録である「諸書物見出し
引帳」が作成され、「当用」の文書を予・仁・法の、非当用の文書を大・度・豊な
どの文書案内に収納し、管理を拡充したことが知られる。
15 豊（名主柳沢家で使用した文書保管用の懸瀬）

学習院大学史料館所蔵

ともと手にかけて持ち歩く形態であった懸瀬は、だいに文書保管用などにも
転用されていた。 「豊」 と名付けられたこの懸瀬は、材質が桐、扉には飾りの少
ない無型の金具、また上面には古い形式の扉手（手に持ち際の金具）が配されて
いる。 小泉和子氏によると、これらの様式・形状から、製作年代は 17 世紀に遡
るとされる（末尾の参考文献 8）。

16 豊（水帳ほか名主とその諸書類抜取）

1782（享保 17）年2月4日 柳沢信政家文書（二）D-31

本文書は、新名主弥右衛門（現柳沢信政家方）が村方三役が、前名主三左衛門
（現柳沢本方）から検地帳をはじめとする 11 件の文書記録を受け取り、またこの
ほかの名主との入用書類も通って引き渡してもらうことを確認した証文である。
これ以前の村明簿帳には、検地帳を当時の名主が頂かている旨の記載があるもの、
17 世紀において名主ともとの文書記録が公的な手続きを通じて引き渡される形式
はない。すなわち、先に見た村政の後承化が進行した時期に、これらの文書記録は
村方三役が管理する公的な文書として位置づけられ、列品 15 の懸瀬とともに引き組
まれたと推定されるのである。

17 諸書物見出し編年 1791（寛政 3）年正月

柳沢信政家文書（一）1356

護書物見出し編年 1791（寛政 3）年正月

柳沢信政家文書（一）1355

18 世紀の末業には、文書箇所や書類ごとに収納している文書記録を書き留めた
目録が作成された。これを図示すると次の通りである。このうち文・法・大の家書
に納められた文書は「当用」、つまり現在使用している文書群であるとされている。
実際、それ以外の文書箇所や書類には「雨年から雨年までの諸書類」というくわ
に年次切りに古い文書が収納されており、とりわけ大・度の場合は後から削されてい

1816（文化13）年、名主所左衛門は「諸書物見出し編年」を作りあげた。そこ
では文・法・大の文書箇所に納められた文書を「手前」つまり私的なものとする一方、
寛・用・高帳簿を村用、つまり共有文書と位置づけた。

ここに示されて登場した「用」は「御用帳簿箇所」との略称であり、引出様態の震
書では、百姓の土地所持、年貢の割付・勘定を証明するもの、また村の共同事務・
管理に関わるものを御用帳の文書記録としている。御用帳は、長百姓制の延長上に
ではなく、高次の百姓たちの枠組みのもとに設置されたことが広かられた。

名主柳沢家の構造は左の synd をであり、代官間と御用帳を中心に、手帳簿・収・
中門・東門で構成される空間こそは、百姓たちの共同世界を端的に示している。
名主柳沢家の構造略図

1791年以降に御用場が開設されたか、あるいは御用場は存在していたがこの間に専用の文書架築が作られたことがわかる。この御用場は特定間にともよばれ、次の図のように位置していた。これらから一部の村用文書は、「御用場架築簡」に収納して百姓が年貢勘定などで出入りする「御用場」に配備されたのであり、その意味で村の公文書として純化したと言えよう。

御用場架築簡（名主柳沢家の御用場で使用した文書架築）

一の引出（背面図書）

この架築簡は、側面が錬、中が絹で作られており、さらに側面には虫をよけるため、紙に絹ガラを混ぜたものを重ねている。また、現状では失われているが、団（カンヌキ＝絹に縁を渡して引き出しが鷹ないようにする一種の絹）の紙があり、大切な文書を保存するにふさわしい形式がとられている。

御用場で使用した文書群の一部

王将兵衛記念館文書、および柳沢信教家文書

1830年代に入って、御用場架築簡の一の引出背面には次のように墨書され、基本的にそれらの文書で御用場が運営されたことが知られる。

＜列品＞

19御書物見出接手引帳

1816（文化13）年6月

柳沢信教家文書（一）1369

本史料から知られる名主家の文書管理は、列品18で見た1791年段階の管理と類 Watchesに位置している。すなわち、ここで何らかの文書架築を「手前」つまり私的な文書とし、寛・用・高帳箱を村用文書として大別している。とすれば列品18で見た文書のすべてが村の公文書として管理されたわけではないと、考えざるをえないのである。

しかし一方、この帳簿にはじめて「用」＝御用場架築簡（列品20）がみられ、
これらの文書の特徴は、必ずしも\n1. 『信州佐久郡五千歩衛新田村御鶴家文書』（一）・（二）・（三）
   （学校院大学史料館、1975・82年）
2. 『五千歩衛新田村文書』第一巻
   （長野県立史料編纂会、1981年）
また本篇を制作するにあたり、つぎの文献を使用しました。これを機にご自身で
学術・研究を進める方は、ぜひもご参照ください。
1. 大石慎三郎『近代村莊近在史の構造とその再生産過程』（『信州村莊の構
   造と家制度』所収、御茶の木書房、1985年）
2. 同『村方三役を内倉に』（長野市役所、1987年）
3. 同『五千歩衛新田村と被差別部落』（帝塚書房、1987年）
4. 同『五千歩衛新田村の宮倉を握ったのは誰か』（『木と村の歴史』』信州農村
   『開発史研究会紀要』第6号、1990年）
5. 同『二つの『開発許可通書』の謎』（『信州農村開発史研究所報』第12号、
   1984年）
6. 佐治谷光・馬田口次男監編『開発と緑水』（『週刊朝日百科 日本の歴史』
   73、信州市立、信州新聞社、1987年）
7. 鶴沢利信『鶴澤家系史』（1978年）
8. 小泉和子『築造』（ものと人間の文化史46、法政大学出版局、1982年）
末尾となりましたが、本書を制作するにあたり、次の皆様にひとたびならぬ協力をいただきました。ここに記し、心から御礼を申し上げます。

長野県佐村村教育委員会
長野県佐村村教育委員会教育長 辻沢正郎 様
長野県佐村村五郎兵衛記念館
（財）信州農村開発史研究所
（財）信州農村開発史研究所 主任研究員 増藤洋一 様
生活史研究所代表 小泉和子 様